

大学出版

No.

2004.3

60 春

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

* 協会四〇周年「記念講演」

大学の変化と出版部の役割

佐々木 毅 —1

特集

大学と教養

知の専有と分散

市井のダンテ学者 大賀寿吉 * 岩倉 具忠 —8

「二一世紀的教養」を求めて * 北川 東子 —12

学問を社会に開くための煩悶 * 黒田 拓也 —15

● 連載

装丁の四季——春 『春と修羅』の装丁 * 大貫 伸樹 —表1

古書のある風景 1 香り立つ十八世紀 * 村井 則夫 —18

歩く・見る・聞く 33 知のネットワーク 嵐山モンキーパークいわたやま —20

大学出版部ニュース —22

AJUPオピニオン —32

関西支部だより —表3

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

日本大学出版部協会



四年間勤めた会社を辞め、不安を抱えながらマンションの一部屋を借り、一人で仕事を始めたころ、この本に出会った。今から二十五年程前の春先のことである。

特にやる仕事もなくブラブラしているところに、訪問販売員が訪ねてきた。抱えてきた沢山の本を広げ、一冊ずつ丁寧に解説をするのを、暇にまかせてうなずきながら聞き入っていた。独立したばかりで払うあてもないのに、気が付くと二十冊ほどもあっただろうが、大部の全集を購入してしまった。食べることだけでも大変な時期にどうしてこんなに高価な本を購入してしまったのだろうか。反省はするがなぜか後悔はせず、すがすがしい思いに満たされた。このとき、衝動的に『精選名著復刻全集』を購入することが、進路を示してくれるような気がしたのだ。なかでも宮沢賢治『春と修羅』の説明には大いに感激させられ、ブック・デザイナーになるという願望を萌芽させてくれた一冊となり、ことあるごとにこの本には世話になる。

ある日、ふと『春と修羅』は大変な思いをして制作した」という販売員の言葉を出し、その真偽を確かめてみようと思いつく。印刷は花巻の印刷所で行われたため活字が十分に揃わず、一折ごとに印刷しては解版し、再度その活字を使いながら印刷したというが、どこかにその証拠があるはずだ。そう思うと、比較的使用頻度の高い「五」という文字を全

装丁の四季
春

『春と修羅』 の装丁

おおぬき しんじゅ
大貫伸樹(ブック・デザイナー)



宮沢賢治『詩集 春と修羅』(関根書店、大正13年)復刻版
装画=広川松五郎

部のページから拾いだし、拡大コピーした。

五五五五五五

最初に印刷された「五」と、最後に印刷された「五」を比較してみると、同一活字が何度も使われ、明らかに摩耗し、活字の一部

が欠損していくのがわかった。装画を広川松五郎に依頼し、布や本

文用紙を手配したりと、この本に注

いだ情熱を知り、賢二の世界を少し

理解できたような気がしてこの本がさら

に好きになる。大切に印刷された本文用紙を慈しむかのように表紙は本文紙

寸法より一センチほど大きく作られた。持ち歩くときには大きめの表紙が三方の小

口を保護するように折れ、中身を守る。タレ表紙と呼ばれ、聖書や教典などによく用い

られる様式だが、まるで本に人格を感じているかのような本に寄せる思いやりに、本作りの

神髄を感じ感激させられた。装丁を専業にしてみたい、と思う気持ちは

このころからますます強くなり、それまでの広告業の収入を絶ち、新たな世界へ飛び込む

決断をした。日々の仕事に追われながらもこの数年間、本棚の『春と修羅』を眺め希望

の成就を願っていた種が、地面を割って芽のチヤンスを窺っていた種が、地面を割って夢に向かつて動き出した。『春と修羅』はそんな

淡い思い出を彷彿させてくれる一冊だ。

■協会創立四〇周年「記念講演」(二〇〇三年十二月五日)

大学の变化と出版部の役割

佐々木 毅

(東京大学総長)



ささき・たけし

プロフィール

1942年秋田県に生まれ、1965年東京大学法学部卒業。1968年東京大学法学部助教授、同教授を経て、1999年4月東京大学法学部政治学研究科・法学部長。2001年4月第27代東京大学総長に就任し現在に至る。著作には、『マキアヴェリの政治思想』、『プラトンと政治』、『政治学講義』、『プラトンの呪縛』等、多数。

学に奉職する者にとって大学出版部はきわめて重要かつ、なくてはならない存在になりました。その意味でまず、このような大学出版部の発展に尽力された皆様方に対し心からの敬意を表し感謝申し上げます。

大学と出版部とのかかわり方

私、改めて「四〇周年記念の会」の案内状を拝見して、大学出版部と一口で言っても、実にさまざまタイプがあるということに大変興味をもちました。この場には、理事長さん、会長さん、そして代表取締役社長の方もおられます。このことは大学出版部が多様な形態で組織されているということを実に物語っており、このような多様性による経営コンセプトの相違性ということもまた容易に想像されます。がしかし、そのような相違を超えて、大学出版部が日本の学術の発信と、大学の学問的成果を広く社会に広めかつ還元していくうえで、大きな役割を果たしてきたこ

日本大学出版部協会の創立四〇周年を記念して何か話をしてくれというご依頼を受け、本日その責を果たさずべく登壇いたしました。

さて聞くところによると、大学出版部協会はいまや二七大学出版部を会員とする組織ということですから、われわれ大

とは改めて申すまでもなく、また協会創立後四〇年にわたる足跡には、非常に見るべきものがあつたと思つています。

ところで事務局のお話では、近年全国的に新たな大学出版部設立の機運があることです。その趣旨は色々だと思ひますが、大学をとり巻く環境が様々に変化して、その中で大学は社会への発信能力を高めるために、多様な手段なり媒体なりを必要とする時代に入った、ということでしょう。このことはなにも出版だけではなく、他の媒体もあるわけですが、大学にとって「活字と出版」が昔もいまも変わらぬ中心的な媒体であることは言うまでもありません。

大学がその知的成果をどのようにして外部に発信していくか、ということは別に今日始まつたわけではなく、そうした大学の活動はこれまでもずっと行われ、かつそれらは社会に伝達され蓄積されてきました。その際日本においては、大学出版部だけでなく一般の出版社がそれを媒介し、そしてむしろその方がある時期までは主流であつたわけです。大学出版部というもの、たとえばオックスフォード・ユニバーシティ・プレスとか、ケンブリッジ・ユニバーシティ・プレスとか、あるいはアメリカの大学出版部、それぞれのイメージにはかなりの差があるように私には見えませんが、考えてみますと、これらの大学出版部というものが長い歴史と豊かな成果とを合わせ持ち、しかもわれわれが外から見る限り、大きな危機や混乱に巻き込まれることなくその活動を続けてきている。このことは一国の文化の水

準とその成熟度を示すものである、と私は認識しています。

大学出版部とは大学の知的成果の発信媒体である、という考え方は、ある意味では至極もつともです。何らかの手段で知的成果を効果的に社会に伝えるということは、大学が、今後ますます社会のなかで広い理解とそれに基づくサポートを得なければならぬ時代に突入した以上、必要不可欠であることは言うまでもありません。しかし、同時にすぐわかることですが、大学出版部が特定大学の関係者だけを相手にしているということになると、その社会的な影響力は逆に作用するのではないかと。もちろんそこには、出版に携わる方々のプロとしての見識というものが当然、共通のコードとして存在するわけで、大学出版事業はなにも「特定の組織と一体の活動である」と定義されたものではない。特に学術的出版ということになると、これはまさにその質その水準というものをどのような形態で社会的に拡大しかつ継承していくかということに、その基本的な役割があるわけで、どこに帰属する人間が書いたとか発表したということとは二の次でなければならぬ。そのような観点からすると、大学と出版部との関係には一種非常にシリアスな側面があるように私には思えます。

先ほども申しましたように出版という、ある種グローバルで、広い意味で私たちの知的生活のバックボーンをなす活動を、大学出版部が担うこと自体については、だれも異論を唱える人はいないと思ひます。また、大学の中にある

すぐれた知的成果を外部に発表し、かつ伝播していくことは、いつの世にもきわめて尊敬に値することですが、このことに大学がどのようにかかわるのか。この間合いの置き方については、今後いろいろ議論が必要になってくるのではないだろうか、とも考えております。

テストされる時代

私が認識しているところ、出版界それ自体がむずかしい状況にある。いまから十数年あるいは二〇年前のことを思うと隔世の感がある。ただその中でも大学出版部については、大きく変化する状況が一方にあると同時に、やはり他の出版の世界とは違う期待と希望とをわれわれはもっていますし、また社会一般も抱いているのではないか。それは何かと言うと、つまりは「学術的」ということです。一般の人々にとってはやや縁遠いものを進んで取り上げ、そこに当然つきまとうであろう経済的リスクにもかかわらず果敢に取組むという、現代社会においては得がなくなりました。このような要素を、大学出版部はもち続けていたいただきたい。そうでなければ、大学出版部とは何か、という疑問が出てきてしまうのではないのでしょうか。

私自身の体験に照らしてですが、諸外国のユニバーシティ・プレスや書籍に出会うたびに、学問をする者としては、そこに第一印象としてある種の尊敬の気持ちというのがある。日本の大学出版部の場合も、おそらくそれと大

いに違うということはないと思います。「学問をする」ということは社会的には決してありふれたことではない、また言うまでもなくそのことが経済的利益に直結することもない。しかし「学問をする」こと、またそこにまつわるさまざまな知的成果に接触することの、人間としてのある種の喜びと興奮、また他では味わうことの出来ないある種の精神的満足と精神的緊張というものが、これらのことを社会の中にどのようにして蓄積し保存していくかということは、決してやさしいことではないのです。

戦後の日本社会にあって、経済を軸に社会全体のパイが拡大していくときは、そういうものも、紛れ込むようにしてであれ何であれ、社会の中で一定の位置を確保することができた。評価はどうあれ、あるいは社会の片隅であれ、そういうものがある程度存在しても特に問題になることもないし非常に冷たく扱われることもなかった。しかし、一国の文化なり知的世界というものは、おそらく順風満帆の時代にテストされるのではない、むしろそうではない時代に、その社会には、何が、精神的満足として、あるいは確固とした知的成果として存在しているのか、このことがテストされる。つまり、だれもが好きなように物を買ひ、本を読み、そしてどんどん豊かになり、そして楽しいことが増えていくような社会であれば、必ずしもすべての人々に共有されることのない知的成果も、社会はそれなりにとり込んでくれるが、そうでない社会状況になったときに、そ

れらをどのようにしてその社会の中に存続させ得るかを、われわれはテストされるのです。

「大学とは何か」をめぐる

このことは実は、大学出版部にも複雑な問題を投げかけます。大学出版部という存在はどうかという点に独自性があるのか、と考えると、言うまでもなく、大学と深くかかわり合っていることです。裏返して言えば「大学とは何か」がわかりにくくなった社会では「大学出版部とは何か」もはっきりしなくなっている。あるいは、大学とはそれ自体で、他の組織がとってかわることのできないある種の役割を果たす存在である、という社会的認識が希薄になると、大学出版部もまた社会の中で何を基準にしてものを考えたら良いのか、あいまいになってしまう。すべてとは言いませんが、そういう関係にあることは事実ではないでしょうか。

「今日の大学とは一体何なのか」、世上の議論を繰り返すつもりはありませんが、ただ、大学というものが常にある社会においてユニークな組織として存在している、という、この何となくあった共通理解が、いつでもどこでも妥当するのかが、このことはやはり考えておかねばならない。実は私、文科科学省の審議会「大学分科会」に属しているのですが、そこで「大学とは何か、ということが分からないのです」という議論が一番扱いにくく、かつ困惑する議論です。つまり「多様な教育機関がある中で、一体、なぜこ

れを大学と言うのか、あるいは言わないのか」という議論が増えてきた。これは非常に大きな変化であり、深刻な問題を孕んでいる、あるいは論じられるべき問題があることを示唆している。つまり「大学」という言葉あるいはその概念は、行政が「これは大学である」とのお墨つきを与えたことだけで成り立っているのか、それともそれ以上に何か意味あるものが含まれているのか、こういう問題です。

戦後、われわれはそういうことをあまり考えずに、大学というのはいかに安定的に存在だと思いついてきたのではないか。しかし今日では、何となくであっても、社会的に了解されている、とは言えなくなってきた。現に、大学とは言っても色々な大学がある、この多様性を無視して「大学」と一括りにしてしまつて良いのか、という議論がある。さらに、たとえばある観点からは、学部と大学院の問題も非常に大きくなってきた。われわれは長い間、大学という何となく「学部」のことを考えてきたけれど、文科系においても「大学院」に対する社会的注目度が急上昇してきた。このことが一体どのような意味をもつのかについては、実は諸説紛々です。他方には「短期大学」というものも、もちろんある。つまり、われわれの周辺でいま起こっていることは、「大学」という概念の多様化」と言ってしまうべききれいな表現になるけれど、これらのことはある意味では「大学の解体」かもしれない、あるいは行先不明な漂流であるかもしれない。立場によってさまざまな議

論が成り立つでしょう。が、それはともかくとしても、それぞれ「大学なるもの」がどのようなものであろうとするか、についての自己定義をより明確にしなければならぬ、このことだけは非常にはつきりしてきた、と私は思います。このことにかかわってもう一つ盛んに行われている議論に「教養教育の重視」というのがある。多くの大学で教養部あるいは教養学部を解体したばかりなのに、今度は教養教育重視という議論は一見奇妙に思えますが、これは組織の問題であって実態の問題ではないのかもしれない。判で押したように「専門性と先端性こそが」という議論をする人が同時に必ず「教養教育の必要性」という話をする。大学関係者はその間を右往左往する、そのようなことも少なからず見られるのです。

「人間としての創造性」への途

ではここで視点を移して、大学をめぐる世界の議論をみてみると、そこにはある傾向がはっきりと浮かび上がってくる。その一つが、大学とは「知識基盤型社会に必要な人材育成の場」という議論、そしてもう一つが「人間としての創造性養成の場」、英語風に言えば、学生をいかにしてカルティベートしていくか、という議論、この二つの議論がほぼ並行して行われている。そして、知識基盤型社会とか先端的教育ということを先駆的にやってきた大学の関係者は、いまはもっぱら「人間としての創造性」の方を声高

に主張していると、そのように私には感じられる。しかしこの創造性云々の議論ほどむずかしいものはない、どうして良いのか分らない。日本では「大学の個性について」の議論がよく行われますが、「個性」というのは何を意味するのか、単なる目立ちたがり屋なのか、あるいはちょっと変わっているということなのか、よくわからない。ただ間違いないことは、大学は「なるほどと肯けるような何かを持っていなければならない」ということです。

このような議論の中で、カルティベートしていく、人間としての能力を培っていくという、こういう意味での教育的機能というものは一体どのようなようにしたら果たすことができるか、これが議論の焦点です。さまざまに言われていますが、私が見るところ結局、特効薬はない。けれども、Aという先端的知識を身につけるにはこんな勉強をすれば良い、というようなことから答えは出てこない、このことについては多くの論者にあっても、ほぼ同じような認識なのではないか、と私は思っています。

さてこの問題についての私の認識は非常に拙いけれど、ある意味ではごく単純なことではないか、と考えています。こうすれば必ず成果がある、と自信をもって言えるわけではないのですが、何かしなくてはならない。それでその何かとはやはり、一定量以上モノを読み、モノを考え、モノを書くという、この基本的行為ではないか、と思うのです。私の大学にハーバード大学教授がアドバイザーとして

来てくれているのですが、たとえば、「アメリカにもさまざまな大学があるから一律には言えないが、やはり基本的には、読む量と読みこなしで書く量が、日本の場合、決定的に少ない」、こういうことを彼はサジェストしてくれました。まあ一概には言えませんし、大学で、たくさん読んでも、たくさん書いたことが、すぐに具体的に何かの役に立つということではないにしても、いわば触発というのか、あるいはそういう種を蒔いておけば、何が出てくるかは分からないが、とにかく耕すという行為を通して結果として何かが出てくる。あるいは直接的には芽を出さなくても、それを繰り返ししていることが、長い目で見ると「人間の在り方」の深いところに影響を与える、ということはあり得るに違いない、と私は思うのです。

あらためて、大学出版部の役割について

このようなことを思いながら、大学出版部の役割についてあれこれと考えてみて、すべてがそうだとはいえませんが、少なくとも人間の知的な根っこと言いましようか、根本的な所と何らかの形でかかわりをもつような役割を果たしてもらいたい、と私は考えます。たとえば一体どのような本を読めば良いのか、というようなこと一つをとっても、もちろん色々な議論があり、むずかしいことは言うまでもないのですが、何も読まない、何も認識する努力をしない、何もフォローする努力をしない、そういう人間だけが集ま

った社会では、きちんとした議論や物事のきちんとした決着は図れない、このことだけではどうやら確かであり、とすると、大学出版部がどのようにして大学の「知の在り方」とかかわるかということは、非常に大きなテーマになってきます。「知の在り方」の一つである先端的知識にかかわるのは当然かもしれないが、同時に、その効果が目に見えるかたちで出てくるとは限らない、二〇代あるいは三〇代では出ないかもしれない、しかし四〇代、五〇代に出てくるような、そうした「知的習慣づけ」（と私は呼んでおります）、この習慣は若いころ身につけておかないと歳取ってからではとてもむずかしいのですが、そういう人間にとって非常に大事な習慣づけ、これが大学の大きな仕事だろうと思いますが、そうした習慣づけにとって有効な素材を提供するのが大学出版部ではないか、このように私は考えています。

大学をとり巻く環境は確かに大きく変わりました。また「大学の在り方」についても、かつてのように漠たる概念ではとらえられなくなりました。しかし大学は、先端的知識の領域と人間の知的根幹を形成する領域、少なくともこの二つの領域にはしっかりと目を据えておかねばならない。大学出版部が、大学のこのような役割とどのように付き合っていくのか、大学出版部の今後の舵取りに、私は大きな関心を抱いております。ご清聴ありがとうございます。

特集

大学と教養

知の専有と分散

美術史家ケネス・クラークいわく「十八世紀のイギリスはアマチュアの楽園であった」(『芸術と文明』)。

「アマチュア」とは何者か。それは、きわめて専門的な知識を有しながら、しかしかなる制約からも解放されたのびのびとした精神を持ち、自ら知を求め独創的な文化を開花させた「教養人」たちである。

いま、大学や専門書出版の危機の感覚が、新たな「教養」を求めている。私たちは既存の専門的分類や、主義、権威の枠組みを越えて、自発的に自由に知を求める場を創造できるだろうか。また「アマチュア」精神を受け継ぎ、越境して広く知識を狩猟する「教養」の復権のために、大学と大学出版に何が出来るのだろうか。

まずは「教養の体現者」を、民間のダンテ研究者大賀寿吉のなかに見てみたい。つぎに大学内での実際の教養教育をめぐる当事者の心の動きを追って、求められる「二一世紀の教養」のあり方を示唆する。そして大学出版というメディアが、専門知の生成を支えながら、「読む」ことを通して、いかにして専門分野の外に知を拡散させられるかという可能性をさぐる。

市井のダンテ学者 大賀寿吉

岩倉 具忠 (京都大学名誉教授・京都外国語大学教授)

大賀寿吉(一八七〇—一九三六)は岡山の出身で、この都市を貫流する旭川にちなんで「旭江」と号した。大賀氏は大阪の武田製薬株式会社に勤務するかたわらダンテ研究に心血を注ぎ、終生ダンテ文献の蒐集に文字通り挺身した。氏の蒐書は興味本位の好事家のそれとはほど遠く、ダンテ学者としての深い見識に基づく選書基準によって厳密に学問的価値のある質の高いもののみを対象としていることは万人の認めるところである。それだけに情報量の乏しかった当時において蒐書がいかにか苦勞の伴う作業であったか、また待望の書物を入手した時の喜びがどんなものであったかがその書簡の行間からうかがえるのである。氏はまた研究者に対してダンテ文献に関する貴重な情報を提供し、学問的助言を呈し、書物を寛大に貸し与えて惜しめない援助の手をさしのべた。のみならず自身もダンテ学の普及のために進んで啓蒙的な役割を果たした。

幸いなことに、大賀氏は大正期に『神曲』と『新生』の

名訳を世に送った山川丙三郎にあてた二〇〇通にあまる書簡を遺している。そこには、この市井の学者のダンテへの情熱と山川氏との深い交流の姿が克明につづられているばかりではなく、大正期の日本におけるダンテ研究の実情や、ひいては文化状況までもが如実に映し出されており、教養人としての大賀氏の文明批評の一端が読み取られて興味がつきない。「小生の文庫も追々に蔵書の数を増し目録を作らねばと存居申候へども時間も思ふに任せず止むなく打捨居申候 実はおかねて御承知の通り小生英語以外は一向に了解不仕従て蔵書も自分には読めざるもの多数ながらそれを眺めて喜び居り候は自分ながら偏なものとあきれ居候事にてただただこれらの書物を読み役立てらるる人を相待申居候事に御座候」。これは大賀氏がダンテの『神曲』を翻訳中の山川丙三郎に送った大正一二年(一九二三)七月六日付けの書簡の一節である。大賀氏はやや自嘲気味にいかにも自身を単なる好事家であるかのように語っているが、

氏はダンテとイタリア中世文化にきわめて造詣の深い一家をなした学者であり、しかもつねに上述のように愛蔵する書物を惜しみなく研究者に開放し、後進のために役立てることを願っていた。ここには大賀氏が「旭江文庫」を形成した蒐書方針がさりげなく語られているのである。上述の書簡からは大賀氏の人となりが存在にうかがえるばかりでなく、ダンテ研究者としての蒐書への情熱が読むものにひしひしと伝わってくる。またそれは大正から昭和の初めにかけての日本におけるイタリア研究の実情ならびに西洋文化全般の受容についての詳細な状況を如実に映し出すまたとない史料でもある。

ある国の文化事情を計るにはその国の出版状況を調べれば足りるといわれるが、大正元年（一九一二）の日本の出版物の数は、図書二万四〇〇〇種、定期刊行物二三〇〇種を数えるまでになっていた。その内容はどうかといえ「アカギ叢書」などの廉価本でイプセンの『人形の家』、モーパーッサンの『女の一生』、トルストイの『復活』、ワイルドの『サロメ』など西欧文学の傑作が紹介されている。このように西洋文学の初歩的な知識が大衆化したのもこの時代の特長である。しかも大正期のベスト・セラーズのなかには西洋文学の翻訳が多数見いだされる。島村抱月訳のイプセン『人形の家』、戸川秋骨訳のユーゴー『哀史 (Les Misérables)』、さらには生田長江訳のダヌンツィオ『死の勝利』までが数えられることには驚かされる（庄治浅水『日本の書

物』創元社、一九五四）。ただし原作がイタリア語の場合は、ほとんどが他の外国語訳からの重訳である。ダンテの作品もこうした文化的雰囲気の中で紹介されたのである。

この頃になると明治以降のかけ足の近代化の成果が著実に現われ、社会生活は物質面ではたしかに向上したとはいえ、急激な発展の生み出したさまざまな社会的矛盾が次第に顕在化してくる。青年層はこうした趨勢を敏感に捉え、物質的繁栄の背後に精神的な支柱の欠如を痛感し、精神的な飢餓状態に悩むものが少なからずあった。このような傾向に応えたのがキリスト教である。島崎藤村（一八七二—一九四三）初め多くの青年文学者が入信し、キリスト教の影響のもとに創作活動を展開した。ダンテの文学は取り分けそうしたキリスト教文学者から好んで受け入れられたのである。したがって彼らは上田敏（一八七四—一九一六）のようにほとんど例外的にダンテの詩を審美的観点から味わおうとする一派に対し、ダンテの倫理的側面に強い関心を抱き、その強靱な精神と人間的なスケールに着目したのである。後者の代表は熱烈なプロテスタント内村鑑三（一八六一—一九三〇）である。大賀氏のダンテ研究もこうした明治から大正にかけての精神風土とけっして無縁ではない。大賀氏の深い学識は時として彼を大正時代という西洋文化受容の過渡期に対する呵責のない批評家にした。

大賀氏の書簡を通して、大正から昭和にかけて日本ではダンテへの関心が高まり、多くの翻訳や著作が世に出た様

子が手に取るようにわかるが、氏はそうした傾向を喜ぶ一方で、その多くが浅薄な半可通であることを慨嘆している。新潮社版『世界文学全集』に収められた生田長江訳の『神曲』には、よほど堪えかねた様子で、次のようなくだりがある。「生田訳神曲一読仕候。『何でも屋』を誇る人がかかる傑作を訳するは冒瀆とも感ぜられ不真面目なる序文アキレ申候 貴訳利用と思はる所不少候」(一九二九年九月一九日)。「我國にも此頃は折々ダンテに関するもの刊行せらるる様に相成り感謝にたえざる事ながら、さてその内容を見れば腹立たしくもあり、なすけなくもありという次第なるは残念に申候 『万有文庫』の神曲、新生及び詩集の訳、これは己刊の日本訳をくづしたるものなるべく、ダンテを全く台なしにいたし申候」(一九二七年一月三日)。これに対する山川丙三郎の返事(下書き)には「惣じて近頃書肆にあらはるる訳本や批評類にはいかがわしきもの多く……去年出版されしダンテ小説小曲集なるものは久保正夫氏のダンテ詩集を口語に直したること明瞭にてそれも序文に何等久保氏のことを記し置候ざるは不徳の仕打と存候。他人の訳ばかりを台にして自訳製造する發明人は日本にのみあるにあらずやと存じその勇氣におどろくの外無之候」(一九二七年一月二四日)とある。ちなみに大賀氏は当時ダヌンツィオとの華やかな交際で大衆的人気を博していた下位春吉について、「下位氏は何か名を売るに急なるやに相見へ小生などとやり方大に異なるやに思はれ申候」(一

九二一年二月二〇日)と批判している。

大賀氏の東京のダンテ愛好家たちに対する態度というか、対抗意識というか、なかなか興味深いものがある。「東京のダンテ協会はホンの所謂芸術とか何とかにあこがれる風の青年の発起なるやに伝聞仕居候 其発起人の一人竹友虎雄(藻風)は小生両親の懇意にて近頃米國より帰朝のよしに御座候……此人は官吏にて一寸名を知られし故税所氏の息かと存候が今は画など描いてくらし居る人なるやに推察致し候」(一九二〇年二月一四日)。また「東京のダンテ協會の『あるの』も大延引六月一日には発刊との事なりしに未だ其運びに至り不申候様子、かかる事はセンチメンタルなる青年の一時の思付にては中々にやれ不申候」(一九二〇年六月二一日)。

第一次世界大戦終局から間もない書簡には次のような感想が見られる。「欧州に於ける社会の混乱は予想外なるが如く何時果して平和の日の来るや心細く感じ申候事に御座候 デモクラシイの思想の可なるはいふまでも無之候へどもあん愚なるマスの圧制も中々堪え難きものに有之候 軍国主義を破りたりとて誇れる連合軍に却って軍国主義一流の論議が行はれる事など見候時は矢張歴史は繰返へし候ものにて随分おかしき事ながらかかる内に人は進みゆくものとあきらむるの外無之やに存候 かかる状態を見るにつけダンテが政治論に於て一見識を有し致候て而も卓越せる見識を有し居りしはただただ驚嘆の外無之候」(一九一九年

四月一日)。

大賀氏の書簡からうかがい知ることのできる当時の日本におけるダンテ受容の状況は、詩人としてのダンテ像よりもむしろ英雄としてのダンテ像の方が断然優勢であることを示している。つまり原語の詩の美しさを味わうことのできなかった読者は、ダンテの作品の内容をくみ取り、『神曲』の壮大さや『新生』の神秘的の世界に感じ入るとともに、作者の偉大な人物像に魅力を感じたもののようである。西洋文明を受け入れた日本人は、「和魂洋才」の「和魂」がおよそ頼りない代物であることに気づき始め、西洋の精神性に強い憧憬を抱くようになった。その精神性の具体的顕現としてキリスト教徒やダンテの強烈な自我に惹かれたのである。またそうしたダンテ受容の方向性にはカーライルなど英国の作家からの影響が少なからずあったこともなおざりにはできない。

最後に大賀氏の名を不朽にした「旭江文庫」について一言触れなければならない。日本におけるダンテ研究の歴史は、日本で最初のイタリア語学・イタリア文学講座が京都大学に設立を見た経緯と切り離しては考えられない。講座の正規開設は大賀氏の没後数年経った一九四〇年のこととなるが、同講座の誕生は京都大学を中心とする多くの先覚者たちのたゆまざる努力に負うところが大きい。一九〇八年文学部の創設にともない初代西欧文学の教授として招かれた上田敏は「ダンテの神曲」を講じ、もしくは多くの講

演によってイタリア文学を紹介した。ついで厨川辰夫(白村、一八八〇—一九二三)は、西洋文学の総合的研究の観点からダンテ研究を推奨している。一九二二年はダンテ没後六〇〇年記念の年にあたり坂口昂(一八七二—一九二八)、新村出(一八七六—一九六七)、浜田耕作(一八八一—一九三八)、厨川辰夫(一八八〇—一九二三)の諸教授および民間のダンテ学者大賀寿吉、黒田正利(一八九〇—一九七三)講師などにより『芸文』の「ダンテ記念号」が編集され、同時にこれらの人々が中心となってイタリア文化の研究と紹介を目的とする「イタリア会」が組織された。

特筆すべきことは、上述の大賀氏の永年にわたる苦心の蒐書である「旭江文庫」が京都大学に遺贈されたことである。日本では他に類を見ない約二〇〇〇点にのぼるダンテ研究文献の一大蔵書が講座の開設と軌を一にして京都大学附属図書館に収蔵されたことはダンテ研究の歴史にとってきわめて重要な意義を持つ。同文庫は一五〇二年から一九三六年までに刊行されたダンテの著作の原典・原典の各国語訳・研究書・学術誌を含み、ダンテ・コレクションとしては量的にも質的にも今日に至るまで日本随一の蒐書である。

注記

本稿で引用した大賀氏の書簡は「イタリア学会誌」3、7、8、9に
分載された「大賀寿吉氏の書簡」(木村文雄編)による。

「二一世紀的教養」を求めて

北川 東子

(東京大学大学院総合文化研究科教授)

不可解さとの格闘——個人的体験

「現代思想」やドイツ語など、いわゆる教養課程の授業を教えて一九年。この一九年间というものはずっと大学に入ったばかりの若い人たち、こちらが息苦しくなるほど生々な人々を教えてきた。教育はなんといいても、生身の人間相手の仕事で、こちらも生身の人間だからうまくいったりいかなかったり、ずいぶん悩んだ一九年间だった。そして、私にとっての暗中模索のこの一九年间のうちに、教養教育はいくつかの変動の波に見舞われた。だから、私の身のうちには「教養教育の動き」を感知するささやかなセンサーがあつて、ときどきそれが打ち震える。

最初の頃は、漠としていながらも高邁な「教養理念」に、ひたすら振り回されていた。はっきりした教授法もわからない。研究室も設備もない。あるのは、素晴らしい古典のコレクションと、すごい緊張感だけだった。あの頃、私の悩みを聞いてくれた人々には本当に感謝している。ドイ

ツの知り合いにも相談したのだが、しょっちゅう聞かれたのは「達成目標はなにか」ということだった。達成されるべき目標がはっきりすれば、なにをやるべきかがはっきりするのもかもしれない。ひとつの不可解さに直面したとき、人間が行う合理的手続きである。

けれども、この問いに答えることは不可能に思われた。知識でも方法でもない、「教養」を教えるとは、なにを教えることか。一切の実用性からかけ離れたような教育。私には、必然性も目標もわからない。わかっているのは、若い人たちが一度はこの不可解さを通過するという事実と、この不可解さに多くの人々が、この年もあの年も何度となく、教える立場から、そして教えられる立場から直面してきたという歴史だけである。私のセンサー自体が、めちゃくちゃ振り回される。振り回されているうちに、この「ないもの尽くしの教養教育」が、実は、人間のもっとも知的な想像力を刺激するのではないかという気がしてきた。必

然性のないところでは必然性を創り出す作業が求められる。だから、「異文化を理解する」とか「純粹理性の訓練」であるとか、ドイツ語の授業に「教養」のオーラをまとわせる魔術も許された。実際、稀にだが、なにか理念的な次元を共有しているという感覚が生まれ、若い人たちとの不思議な共同性が生まれることがあったのだ。

しかし、じきに、教養教育はこの不可解さのベールを脱ぎ捨てて、はっきりとした輪郭をもった顔を見せるようになる。きっかけは、「大綱化」にともなう教養教育の改革。コミュニケーションに重点を置いた実用語学教育が始まり、『知の技法』シリーズが出版された。「教養」に定義が与えられた。教養は、「技法」であると。コミュニケーションの技法であり、ディベートの技法であり、論文作成の技法である。つまり、「知の技法」である。この天啓に、私はどんなに安堵したことであろう。多くの疑問が消え、教えるべき事柄が明確になり、不可解さとの格闘が無用となった。まだ一抹の不安はあったにしても、「教養」ではなく「技法」を教えることは可能なように思われたからである。ちょうど、狂気のようなバブル経済が過ぎ去り、誰もが成り上りの怖さと足元の脆弱さを教えられた時期だった。おとなしくなり真面目になった若い人たちと、「できるようになる」「使えるようになる」ために教育する日々が始まった。私のセンサーは小さなブレしか感知しなくなった。

新しい兆候

ところが、今また、私のセンサーが大きく反応している。「ゆとり教育」のおおりで理系の基礎教育のやり直しが必要となり、基礎教育の充実をめざして大学の教養教育自体が揺れているのだから、当たり前のようにも思われるかもしれないが、私のセンサーはもっと大きな波でも揺れている。

最初の兆候は、若い哲学者仲正昌樹さんとの会話だった。「若い学生さんたちが教養を求めていますね。」という仲正さんの指摘に、正直びっくり。「えっ！ 今さら、どうしてなの？」と聞き返すと、「教養みたいなものがないと人間をやっていけないのですよ。今の日本のような社会では、贅沢を言わなければなんとか生きていける。でも、ただ、ぼんやりと生活して食べていくだけでは、動物の生活になっちゃいます。だから、人間をやっていくには教養が必要だということとは、若い人たちにもわかっているようですね。」この最初の兆候をきっかけに、いくつかの波が感知された。

台湾・国立政治大学の藤井志津枝さんとの話し合いでも、「教養」が問題になる。日台交流史や台湾の原住民族の文化について研究を行っている藤井さんは、さまざまな横断を行っている人である。ふたつの言語とふたつの文化だけでなく、ふたつの国籍のあいだも軽々と渡ってしまう。そして今、彼女はもっとも大きな横断を行おうとしている。

環境破壊や軍事破壊にさらされた現実の地球空間と、原住民族の生活形態のなかにかすかな記憶として保存されている人類的な生命の空間との間を横断しようというのだ。そのため人間の精神をもちいての「空間との実験」が必要で、「教養」はそれに関わるような知的営みになる。「精神的な空間で、現実の空間を覆い尽くすことが大事なのですよ。」

そして、『知の技法』の小林康夫さんも「教養」を話題にする。彼は、「二一世紀的な」という形容詞を使う。二〇世紀が、専門的な知識と情報の蓄積というかたちでの教養をめざしていたのであれば、二一世紀の今は、別のかたちの教養が求められている。「やっぱり、二一世紀に生きているという実感はあるよね。」

長年、ドイツ語を通して教養教育に携わり、ミュンヘン大学名誉評議員である辻理さんが、やはり「教養」を論じる。「教養」という言葉は、ドイツ語のBildung（形成・育成）に対応する。辻さんによれば、ドイツ語の「教養」にはふたつの背景があるらしい。まずは、後進性。「近代化の後進国ドイツは、ないもの尽くしの状況で、人的資源を育てることで産業化を始めるしかなかった。この事情が、教養教育の背景なのです。」そして、教養の破壊性。「既存の制度内で通用する知識の受け売りでは駄目ですよ。それをもってくれば何かが壊れるような知識であり、破壊が創造につながるような枠組みでなくては……。」

最後に、新しい身体教育の実現のために奔走している身体運動科学の跡見順子さんが、情熱的に「文理融合型・教養教育」について語る。遺伝子レベルでの解明が急速に進んでいるなかで、「人間」という視点がますます希薄になっていく。先端研究と教育とを結びつける鍵は、「身体運動を通して人間を教育する」ということにしかない。「学生の反応を見て御覧なさいよ。ねずみの解剖で筋肉のメカニズムを理解する。そして、実際に自分で走ってみる。走った後で、身体を動かすことで自分の脳が活性化されることをデータで確認する。」ばらばらの情報系が「自分の身体」を入れることでひとつにまとまる。「教養」とは、結東点を発見することだ。遺伝子と自分を結びつける、動くことが動かされることであるのを知る、筋肉の反応と意思の動きを結びつける。

こうした兆候のすべては、「二一世紀的教養」のありかたを示唆している。けれど、「二一世紀的」というのは、二〇世紀の改革のはてに出てくるなかではない。今、大それた兆候のどれもが、「二一世紀的教養」とは、国際的な破壊の流れのなかで生き延びていくための人類的な智慧のことであり、あるいは少なくとも、この智慧を可能とする知的戦略であることを暗示している。

学問を社会に開くための煩悶

黒田 拓也 (東京大学出版会)

ひとつの例を紹介したい。数年前私は、青木昌彦・奥野正寛編著『経済システムの比較制度分析』(一九九六年)という書物を担当した。本書は、青木昌彦教授(スタンフォード大学)と奥野正寛教授(東京大学)による東京大学経済学部におけるジョイント講義がベースになって編まれたものである。原稿作成作業は講義と並行して進められた。当時東京大学大学院博士課程に籍をおく若き研究者4名の協力を得て、講義をテープにとり、それをある程度まで文章化してもらい、そのたたき台をもとに編集会議を開くというサイクルを繰り返した。学生を前にして語られた講義内容を吟味しより精緻な理論モデルが整えられ、それがまさに現実の経済を見るための有力な視角としてかたちづけられていく。この編集会議は私にとって知的興奮に満ち、新たなものが生成されていく現場に立ち会える機会となり、刊行した書物は、新しいテキストとして幸いに多くの読者に受け容れられた。

上記の例のような、最先端の知見に触れる、過去の研究蓄積をふまえて考え抜かれた概念、ことばに出会うその瞬間は何物にも変えがたい。日常の活動のなかでそのような場に立ち会うことは、正直言ってそうめったにあることではない。例に挙げた体験は幸運なことだと思う。ただここでひとつ言いたいことは、(先の例はテキストとしての書物をつくるプロセスの一環であったが)大学のなかでは、多様な研究者が関わり、日々知的緊張感に溢れた場が数多く創生されているであろう、ということだ。そこから現れる成果は多彩で刺激に満ちたもののはずである。

「大学に於ける研究とその成果の発表を助成するとともに、広く一般書、学術書の刊行により学問の普及、学術の振興を図る」。これは、私が所属する東京大学出版会の設立趣意書のなかの一文である。多様な形態をとる各大学出版部においても、その活動の目的かつ期待されていること

は右の文にほぼ集約されていると言ってよいだろう。大学それ自身、またそれをとりまく状況が大きく変化している現在にあっても、われわれが実現しなければならぬ、また求められている「ミッション」は変わらない。趣旨は明確である。しかしながら、その「ミッション」実現のための具体的な方策を考える段になると、とたんに暗中模索となるのが私自身の偽らざる現実である。「ミッション」の意義は重く、そして変わらぬ。われわれの活動もそれに沿って進めているつもりである。でも本当にその意図を実現しているという確かな感触が得られているわけではない。この「違和感」はなんなのだろうか。

先端的な学問的成果をまとめた「専門書」は、どんなに工夫しても多くの「一般」読者にとって必ずしも近づきやすいものにはならない。それを十分に自覚したうえで、学問的成果を「社会に開く」という意味を考える必要がある。「わかりやすく書いてください。」時折、著者に対して何の気なしにこのことばを口にしてしまう。著者からその叙述のあり方の説明を求められれば、その著作に即してイメージを伝えることは可能だ。でもそのときの「わかりやすく」の意味するところは正直、私のなかで明確ではない。その曖昧さは、学問的成果をどのようなかたちで「社会に開く」ことができるのかを模索しつづけるプロセスの只中にあることの証しであろう。

日本では、なにかと「大学」や「学者」に対してネガティブなイメージが植えつけられがちだが、なぜそうなってしまうのだろうか。冒頭の例も含めて、私が編集者として「学者」である著者の方々と書物をつくる過程、および大学のなかに身をおく日常で体験してきたことは、ポジティブな側面が多い。このことはぜひ多くの人たちに知ってもらいたいし、私が経験したような興奮をなんとか伝えたい。しかしながら、個々の学問が相当に専門化、高度化している現在、大学のなかで語られていることを「生」のかたちで、すなわち専門家同士でしか通じない「ことば」のまま提示してしまうと、とたんに大学の学問的成果をひろく社会に還元していくという「ミッション」から乖離してしまう³。このことは、なにも今にはじまったことではなく以前から自明のことではないか、と思われるかもしれないが、その社会との乖離をいかにして埋めていくかは必ずしも「自明」ではなく、実際、大学におけるダイナミズムを研究者もわれわれも適切に表現できていないのではないだろうか。だからこそ、大学の外にいる多くの人びとからみると、これまでさして変化もなくなんだかよくわからない研究(書)が再生産されているように見える。そうすると「大学」や「学者」がネガティブな存在としてイメージされ、「変わらなきやいけない」代表格として位置づけられてしまう。昨今の状況はそれを示しているように思う。

先の「違和感」の原因は、その負のプロセスにわれわれ

が加担しているのではないか、われわれは本当に大学の成果を外に開くための術を確立しているのだろうか、そういったことを自問し、苦悶しつづけているところにある。

ひとつの成功例から考えてみたい。一九九四年に東京大学出版会から刊行された『知の技法』はベストセラーになった。刺激的なタイトルや斬新な内容もあって大いに話題になったことをご記憶されている方も多いだろう。刊行後一〇年も経過し、「東大のテキストがベストセラーになった」という印象はあっても、この書物の意義を冷静に振り返る人はあまりいないのではないか。しかしながら、私にとってこの書物は現在に至るまで、日々の編集活動、また未来への企画活動にとって重要な指針となっている。本書は、研究者自身が取り組む研究テーマの面白さや意味を伝えるその一端を実演してみせ、そうして人になにかものを伝えるときの「ことばのあり方」の重要性を、編者を中心に執筆者の方々が丁寧に提示してくれたものと私は理解している。

人と人とのコミュニケーションで大切なのは、お互いに「ことば」が正確に通じることである。これはわれわれが関わる学術出版についても同じである。いかに専門化・高度化した学問体系であれ、ある対象を分析するのにテクニカル・チームだけを並べることはありえない。そこにはどんな人にも通じる「ことば」が介在していなくてはならな

い。その「ことば」はどのように導かれ積み重ねられ、そして一冊の書物となっていくのだろうか。その実践としての成功例がまさに『知の技法』であり、冒頭に挙げた書物もその一つであろう。

さまざまな工夫が重ねられ、しかも「大学」という場からしか登場しえなかった二つの書物、それがいまだに多くの読者に受け容れられていることの意味は小さくない。大学出版部に身をおくものとして、「大学の学問的成果を社会に開く」まさにその「大学」と「社会」の姿をしっかりと見極める努力をし、人びとに向けて通じる「ことば」を、研究者（著者）の方々の力を借りて吟味し、つくりあげていなくてはならない。妙案はなく、日々の実践あるのみである。その深まりによって書物の真価、そして大学出版部そのものの存在意義が決まるといってもよいだろう。

注

(1) 瀧澤弘和（経済産業研究所フェロー）、関口格（京都大学経済研究所助教授）、堀宣昭（九州大学大学院経済学研究院助教授）、村松幹二（法務総合研究所研究員）の四氏である。

(2) この大学出版部における「苦悶」は、私の同僚である後藤健介が『大学出版』五五号（二〇〇二年）で博士論文をベースとした書籍の刊行について述べている。

古書のある

風景

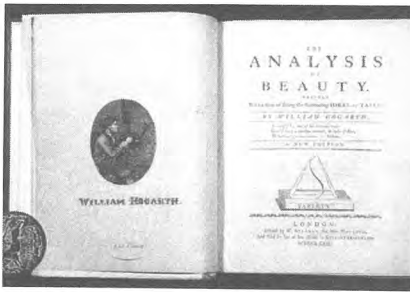
「こじよのあるふうけい」

1

香り立つ十八世紀

村井 則夫

撮影：別宮幸徳
Alpa 10d, Kern Macro-Switar 1:1.9 f=50mm, Konica SFA



『美の分析』の扉。見開き左の肖像画は前の所有者の貼り込み、その下の文字は手書きでの加筆。

長い時代を経てきた古書は、その世紀独特の香りを身にまとい続けているようだ。私の部屋で少々古めの書物を収めている書棚を開くと、何とも言えない不思議な匂いが仄かに辺りにただよってくる。古い子羊皮やモロッコ皮、ヴェラムなどが放つ独特の匂いなのだろうが、新しい皮とは違って、動物の生命を思わせる生々しさは感じられない。かといって死の香りというほど陰に籠ったものではなく、むしろさばさばとして、時代の流れを生き抜いたたたかさに裏打ちされた、それなりに味のある匂いである。関心のない人からするとただ単にかび臭いだけの骨董の匂いなのだろうが、私などは、ああ、これこそ十八世紀の匂いだなどと、変に納得して、時代の空気に触れたような気分にもなる。

世紀をまたいだ古書として、最初に入手したのはホガース『美の分析』*The Analysis of Beauty*の第二版（一七七二年）だったと記憶する。この書物の特徴は、本文での美学理論を図解するために、ホガース自身の図案による二葉の大きな銅版画が付されているところにある。その図版は、十八世紀的な美の理想とみなされた滑らかな蛇状曲線のさまざまなタイプを並べて提示するサンプル表であると同時に、それらのS字曲線を実際に組み合わせた一幅の絵画にもなっている。古書の「現物」を手し、折込みになっている図版を開いてみてまず驚いたのは、その銅版画の刷りの明瞭さであった。それまでも複製などでは幾度も目にしたことのある図版ではあるが、これほどまでに鮮明に彫の線が感触できるというのは驚愕であった。圧が加わって紙面に食い込んだ線は、思わず指でなぞってみたくなるような生々しさをもっている。版画というのは、けっして「平面」ではなく、むしろしっかりとした厚みをもった「立体」であるということを意識させられる経験でもあった。さまざまな意味や物語りを詰めこむホガースの版画は、「見る」のではなく「読む」べきものだと言ったのはチャールズ・ラムだが、それに加えて、版画の現物というものは、実際に指で「触る」べきものでもあるらしい。そ



右の銅板画(画面右下の一部)の拡大。彫の線が鮮明に見て取れる。



本文解説用の折り込みの銅板画。周囲が画像サンプルの一覧になっている。

これは本文の印刷に關しても同様であつて、当時の鮮明な活版印刷は、古書として古びて見えるどころか、むしろその揺るぎない鮮やかさでしつかりと目に焼きつく。

私の入手した『美の分析』の装釘は十八世紀当時のものではなく、おそらく二十世紀に入ってから装釘し直されたものである。もちろん古書の場合、こうしたことはけつして珍しくはない。十八世紀にはいわゆる版元製本(パブリッシャーズ・バインディング)というものが成立していないので、買手は印刷された紙の束を購つたうえ、職人に依頼して思い思いの装釘を施すのが普通であつた。そのため、これが仮に十八世紀当時の装釘であつたとしても、書物は基本的に一点ものである。大量生産品でありながら、実際に本としての形を取る際には複数の職人の手がかかり、その書物を世に一つ限りの稀有なものとしている。手元の『美の分析』にしても、十八世紀の本文に二〇世紀の赤モロッコ皮で装釘が施され、John Cranch という人物の蔵書票が添付され、別の版画から取られたホガースの肖像が貼り込まれたうえ、くだんの図版には、おそらく前の所有者の手になるものと思える補強の痕がある。古書というものは、このように多くの人の手に触られることで、由来や来歴という意味でも独特の匂いや香りを塗り重ねていくものらしい。

同じく古書好きのごく近い人から、私の傍に寄ると古書の鄙びた匂いがすると言われたことがある。十八世紀の香りを身体に焼き染めているのなら、それこそ身に余る光榮というものだろう。世紀も変わつて、二一世紀となつたいま、その古書の匂いも一世紀分だけ時の厚みを増したことになるだろうか。

(明星大学専任講師)

嵐山モンキーパーク いわたやま



サルたちの屋食。外で餌を撒くのは職員だけ。お客さんは奥の休憩所の中から餌をあげる。

今回紹介する「嵐山モンキーパークいわたやま」は、京都市西郊の景勝地にある野猿公園である。付近には天龍寺などの名刹が多く、春は桜、夏は鶉飼、秋は紅葉と見所が豊富だ。桂川にかかる渡月橋の南詰めから上流へ少し遡ったところに入り口があり、そこから二〇分ほど山道を登ると休憩所のある広場があって、京都市を一望できる。この広場がサルたちの餌場になっている。現在、約一七〇頭のニホンザルがこの野猿公園におり、入園者は休憩所の中からサルたちに餌をあげることができる。餌を貰ってよい場所や貰ってよい餌の種類を厳格にサルに覚えさせておかないと、さまざまな問題を引き起こすので、休憩所以外の場所では、食べ物を与えることはもちろん、それらしきものを見せることも厳禁だ。

嵐山にもとすんでいたニホンザルの群れを一九五七年に餌づけして、一般の人々にもサルの観察ができるようにしたのがこの公園の始まりだ。餌づけを始めた間直之助が主人公のモデルといわれる遠藤周作の小説『彼の生きかた』（新潮文庫）で当時の雰囲気を知ることができる。開園以来、研究者をはじめ、一般の観光客や常連の写真愛好家たちに親しまれてきた。園内にはツツジやカエデなど季節を彩る植物が多く、休日ともなると望遠レンズや三脚など本格的な装備を持った写真家たちが大勢訪れ、サルたちの四季折々の姿をフィルムに収めている。写真雑誌のコンテストの常連入賞者や写真集を出版した人もいるそうだ。京都大学の霊長類研究は世界的に知られているが、この嵐山も主要なフィールドの一つである。餌づけ群であるから、純粋な野生状態のサルを研究することはできないが、間近に観察できるメリットは大きく、研究テーマによっては大きな成果を期待できる（舞台は長野県の地獄谷だが、小会刊『知恵』はどう伝わるか）（田中伊知郎著）はアカンボウの口の動きから実質的な授乳期間を厳密に測定したり、毛づくろいにおけるシラミの卵取りの技術が母から娘へと伝播する様子を明らかにしたもので、餌づけ群ならではの成果だといえる。毎年、理学部

所在地 〒616-0007 京都市西京区嵐山元禄山町8
 開園時間 3月1日～3月14日 9:00～16:30
 3月15日～11月20日 9:00～17:00
 11月21日～2月末日 9:00～16:00
 年中無休 ※ただし大雨、大雪、台風の
 ときは休園する場合がある。
 入園料 おとな500円、中学高校生400円、小学生
 300円、こども150円（4才～就学前）、
 30名以上50円引。
 電話 075-872-0950（FAX兼）
 URL <http://www.iwatayama.ne.jp/>



石遊びをする若いサル。いかにして始まったのか、なぜ餌づけ群だけなのか、謎は多い。

の三〜四回生向け実習が行われるほか、常に数名の大学院生が研究をしている。過去には、サルを見に来る人間を観察して論文をまとめた学生もいたそうだ。小会から刊行しているサル学関係の書目で嵐山を舞台にしたものはまだないが、著者たちの多くはここでフィールドワークの修行をしてから、屋久島（ニホンザルの亜種ヤクシマザル）や中国（チベットモンキー）、マダガスカル（原猿類）、アフリカ（チンパンジーやゴリラ）へと進出していった。

ニホンザルの文化的な行動という点、宮崎県幸島の「イモ洗い」が有名だが、嵐山では両手に石を持ってこすり合わせたり打ち鳴らしたりする「石遊び」が知られている。この行動は餌づけ群だけで観察されており、六〇年代から記録があるそうだが、本格的な研究は、八〇年代の初めからここで観察をしていた京都大学霊長類研究所のM・ハフマン助教（当時は理学部研修員）によって始められた。テレビで何度か紹介されたので、ご存知の方も多だろう。アカンボウがどのようにして石遊び行動を獲得するのか、他の地域の群れとの比較、なぜ石遊びをするのか……など興味の種類は尽きない。

日本には、嵐山のほかにも地獄谷や大分県の高崎山など、いくつかの野猿公園がある。これらのサルたちは餌づけされているため、もともとその地域に野生でいたときよりも個体数が増えている。もし急に餌づけを止めてしまえば、農作物を荒らしたり人を襲ったり、いろいろな問題を引き起こすだろう。入園者の減少で二〇〇一年に休園した和歌山県の椿野生猿公園では、約二五〇頭のサルを一〇年かけて一〇〇頭以下に減らして野生に戻す計画だそうである。サルに限ったことではないが、餌づけしてしまった野生動物に責任を持ち続けることは容易ではないのだ。多数の入園者が訪れ、マナーを守って嵐山のサルたちと触れあうことにより、かれらがこれからも人間と共存していくことを期待したい。

（京都大学学術出版会 高垣重和）

大学出版部ニュース

▼創立四〇周年記念講演と「感謝の会」、盛大に執り行われる

協会創立四〇周年記念事業の山場として位置付け準備してきた「記念講演と感謝の会」が、昨年十二月五日、学士会館本館において、来賓・招待者、各出版部代表者等二百余名の出席者を得て成功裏に挙行された。第一部「記念講演」で講師・佐々木毅東大総長は「大学の変化と出版部の役割」について熱弁を振るわれ百名余の聴衆を唸らせた（講演要旨は本誌に収載）。第一部「感謝の会」は一八時三〇分、協会副幹事長・山本俊明の司会で開会、幹事長・渡辺勲の挨拶に続いて、佐々木毅先生（東大総長）、清成忠男先生（法政大学総長・理事長）、松前達郎先生（東海大学理事長・総長）、そして書協理事長・朝倉邦造様から激励とお祝いのお言葉を頂き、協会初代幹事長・箕輪成男先輩による乾杯の音頭で開宴となった。宴の後半、丸善取締役・浮田克之様、日販常務・橋昌利様、とうこう・あい社長・鐘ヶ江輝久様からご祝辞を頂戴し、二〇時に副幹事長・市川昭夫の中

締めで閉会となった。来賓各位をお見送りした後、協会関係者による記念撮影（下段写真）を行い、当日のすべての行事を無事にやり終えたことを確認しあって、二一時、散会となった。

▼創立四〇周年記念ブックフェアの報告
昨年五月から、営業部会の総力をあげて取り組んできた全国縦断大学生協書籍部店頭でのフェアは、京都大学ルネ、東北大六店舗、名古屋大学南部・北部、大阪大学豊中、九州大学文系・理系・六本松、慶應義塾大学三田・日吉・矢上、中央大学多摩、法政大学市ヶ谷・多摩、と展開し、本年初からの早稲田大学コープラザ・文学部、東京大学本郷・駒場でのフェアによって幕を閉じた。このような店頭展開と平行して、フェア用に作成した「重点商品カタログ」によるカタログ・フェアも横浜市立大学、立命館大学、新潟大学、関西大学、東京都立大学、大阪市立大学、同志社大学、玉川学園等十数の生協書籍部で開催した。また一般書店店頭展開としては八重洲ブックセンター本店（二月上旬）を実現し、同時

に、丸善学術情報ナビゲーション事業部・三省堂ネット事業部との連携による図書館向けの販売促進にも取り組んだ。



北海道大学図書刊行会

▼佐々木馨著『北海道仏教史の研究』(A5判・一〇〇〇〇円) 北海道における仏教の伝播と展開の歴史を中世から現代まで通観する。〈広域的、「開教」開拓、比較宗教史、民衆史〉の四つの視点から纏めた著者の長年にわたる研究成果の集大成。▼伊藤孝著『ニュージャージー・スタンダード石油会社の史的 연구』(A5判・九五〇〇円)一九二〇〜六〇年代までの事業活動の歴史を、緻密な実証分析に基づき解明する。現代において主要なエネルギー供給の役割を担う石油産業の構造と現代経済に占める位置を明らかにし、その将来像を展望する。▼富田康之著『海音と近松』(A5判・六〇〇〇円)紀海音は近松門左衛門と比較して語られることが多く、評価のほとんどは近松に劣るとされている。本書は新たな角度から海音作品を分析し、今後の海音研究に一石を投じる意欲作。▼森島啓子編著『野生イネの自然史』(A5判・三〇〇〇円)美しい花も良い香りもなく地味ではあるが、われわれ日本人にとってもっとも身近な植物である「稲」の祖先種について、その多様な適応戦略をさぐる。

東北大学出版会

▼尾坂芳夫著『風土が育む日本の技術知―地球社会的知への止揚』(A5判、二五四頁、一九〇〇) 科学技術は、高度に発達して人類に豊かさをもたらしているが、近年は、環境の悪化、殺戮兵器の先鋭化などの大きな問題を突きつけている。このような困難を抑制しながら、全民族の反映につながる秩序を探るときに、日本の風土に育まれた、自然調和的で感性豊かな心性と技術知が本質的な役割を果たす。この観点から、日本の技術知の本性を歴史の中に探り、科学精神の根源に遡った教育を行うための方法理念を説く。▼平川直弘・岩崎智彦著『原子炉物理学入門』(B5判、三四〇頁、一五〇〇円)原子炉の設計に於いて現実を用いられている計算コード手法の基礎である「原子炉物理」についての理解と知識の習得を目的とした入門書である。本書では特に、原子炉物理の根幹をなす中性子と原子核の相互作用と計算手法の結びつきが明確になるよう解説している。また、原子炉主任技術者試験受験者の便宜を図るため、過去の原子炉主任技術者試験の問題から全ての演習問題を選んだ。

流通経済大学出版会

平安女学院大学教授 安福恵美子著
『ツーリズムと文化体験』
グローバルな現象としてのツーリズムは、レジャーを目的として移動するツーリストが、そのプロダクトの一部となるという特性をもつ。したがって、ツーリズム・プロダクトのプロセスを問うことは、社会的に構築されるツーリズムという〈場〉に織り込まれる諸要素の関係性をみることである。
本書においては、新たなツーリズム形態の創出、さらには従来のツーリズム形態の持続に関わる「経験のマネジメント」を文化生産として捉えることによって、異なる〈場〉に存在するコードがプロダクトの創出に関わるかについて分析を行っている。そして、ツーリストとその経験を提供する人々の経験という位相の異なる経験が創られる〈場〉において、プロダクトを変化させるインタラクティブ・プロダクトを生じさせるためのさまざまなセッティングをツーリズム構造として捉える。それによって、ツーリズムという〈場〉を語るための視点を示している。

聖学院大学出版会

▼マックス・スタックハウス著・深井智朗訳『公共神学と経済』（四六判・近刊）。現代において、宗教の機能とは、個人の敬虔の問題であると矮小化して考える一般の傾向がある。また宗教とは、だれにでも与えられている真理の問題として拡散する理解がある。このような理解に対して、著者はキリスト教神学の伝統の中から「スチュワードシップ」「コーポレーション」（会社）などの概念を吟味し、キリスト教信仰は、個人の敬虔にとどまるものではなく、公的領域に関わり、現代の政治経済の複雑な課題に対しても「解釈的で規範的なガイドラインを提供する」ことを論じる。

本書は、キリスト教神学に止まらず、現代の経済を中心としたグローバル化の中で、国家を越えた公共性のビジョンを構想し、また私的な利害を越えた共同性を形成していく緊急の課題に示唆を与えるものである。

著者のマックス・スタックハウスはプリンストン神学大学院のキリスト教倫理学教授である。

麗澤大学出版会

▼大島清著『大島清の「快老」学』（四六判上製・一四〇〇円）「快老」とは耳なれない言葉に違いない。しかし、読んで字の如し。身心ともに壮健で、積極的に社会に働きかける気力旺盛、適度な「快感」の好循環を実現して潑刺たる老齡期を生きる——快老する——には、何をし、何を心がけるべきか。少子高齢化時代のとば口に立つ誰にとっても、重要なテーマだ。著者は京都大学名誉教授。

▼小林道憲・安田喜憲『対論 文明のころを問う』（四六判上製・一六〇〇円）ハンチントンの『文明の衝突』を待つまでもなく、21世紀の地球文明は重大な岐路にある。本書は、東西文明を俯瞰しつつ、9・11テロ後の文明の現状・未来を政治、社会、科学技術、倫理、宗教など様々な角度から考察し、卓説・新説を展開した「生きた」比較文明学講義だ。



『対論 文明のころを問う』
本体 1,600円(税別)

慶應義塾大学出版会

▼国分良成著『現代中国の政治と官僚制』（三四〇〇円）計画経済を支えた官僚機構の頂点たる国家計画委員会の歴史を分析し、一党支配の構造的課題点を浮き彫りにした、第一人者ならではの研究。

▼赤木完爾編著 慶應義塾大学東アジア研究所叢書『朝鮮戦争—休戦五〇周年の検証—半島の内と外から』（四八〇〇円）関係各国（韓朝米中ソ）の一次資料を駆使。

▼辻村和佑編『資金循環分析の軌跡と展望』（三〇〇〇円）慶應義塾大学産業研究所が誇る当該分野初の先行研究論文集。

▼白井厚・浅羽久美子・翠川紀子編、慶大経済学部白井ゼミナール調査「証言—太平洋戦争下の慶應義塾」（二四〇〇円）オーラルヒストリーという手法で綴った「太平洋戦争当時の大学」の貴重な記録。

▼河北展生・佐志傳著『福翁自傳』の研究（本文編・注釈編）（二七〇〇円）自伝文学の世界的名著を詳細に検証した画期的研究書。（本文編）速記者による口述筆記に福澤自身が加筆修正した原稿を二色刷で忠実に復元。（注釈編）歴史的资料等との比較により、内容の意義をあらためて厳密に考証し、詳細に注解。

産能大学出版部

厚生労働省実施「ホワイトカラー職務能力評価試験」テキストとして最適な一冊
▼細井和昭他編著『経理実務』（二〇〇〇円）

本書は経理実務を体系的に整理し、経理担当者が身に付けるべき知識を理解しやすいようにまとめている。経理・財務担当者の職務能力、専門的能力向上に役立つ実務書。

▼土屋裕・中神芳夫共著『価値追求の基礎』『価値追求の実践1』『価値追求の実践2』『価値追求の管理』（各二二〇〇円）
V Eプログラムラーニングシリーズ全4巻。

企業の誰もがV Eに通じてもらうことを主眼において、理論から実践、管理にいたるまでの過程を、プログラム学習の形式で簡単に習得できるように編集。

これからV Eを研究する人にとって有効だけでなく、すでに手がけたことのある人にとっても再レビューに役立てることができます。

専修大学出版局

▼小島直、他『天然ガス産業の挑戦』（二八〇〇円）九〇年代以降、世界各国はエネルギー供給安全保障、環境保全など困難な課題に直面して一次エネルギーの選択を改めて問われている。その中において、天然ガスは二十一世紀の重要なエネルギーとして注目されている。天然ガスをめぐる各国の産業と歴史、利用技術の進展などを包括的に検証し、天然ガス産業の未来を展望する。

▼岡田好史『サイバー犯罪とその刑事法的規制—コンピュータ情報の不正入手・漏示に対する法的対応をめぐって』（二八〇〇円）インターネットの脆弱性につけこむ犯罪にどう対処すべきか。本書は最新の技術動向に基づき、人的・技術的対策と法律がカバーすべき領域を検討し、セキュリティ問題を考察する。

▼遠藤郁子『佐藤春夫作品研究—大正期を中心として』（二四〇〇円）発表時の時代背景を視座として多彩な作品を読み解き、時代を批評し続ける先鋭的な存在としての佐藤作品のあり方を明らかにする。西班牙犬の家、美しい町、佐藤春夫の〈失恋もの〉、など。

大正大学出版会

▼『梵藏漢対照『維摩経』『智光明莊嚴経』（16年3月刊行予定）

大正大学は、仏教を建学の精神として創立された。当初より仏教学研究には歴史があり、今日までその成果が蓄積されている。仏教文献学においても聖語学研究室が設けられ（後に梵文学研究室）、研究が進められている。今回、チベット自治区ポタラ宮に所蔵されている梵文（サンスクリット語）写本を中心とした文献調査で、これまでに見ることでできなかった『維摩経』『智光明莊嚴経』の梵文写本（貝葉本）を発見した。

本書は、この新出の梵文写本を全文翻刻し、さらにチベット訳、漢訳を対照させ、別冊で面経典の解説、参考文献等を付して刊行する。

『維摩経』『智光明莊嚴経』ともにチベット訳、漢訳は存在したが、完全な形で梵文写本は初めてであり、今後の仏教研究にとって貴重な資料である。

▼『グローバル時代の宗教間対話』（星川啓慈・山梨有希子編）、「家族の物語」（伊藤淑子著）等も近日中に刊行予定である。

玉川大学出版部

▼玉川学園創立75周年記念出版『金田一春彦著作集』全12巻(各八五〇〇円)別巻(五〇〇〇円)音韻・アクセント研究の金字塔「日本語音韻の研究」「国語アクセントの史的研究」など代表作を網羅。滋味溢れる随筆集も収録。編集委員●秋永一枝/上野和昭/上参郷祐康/倉島節尚/桜井茂治/代巻芳賀綴/南不二男。

①国語学編一●日本人の言語表現/話し言葉の技術/日本語の表現②同二●新日本語論/日本語への希望/日本語の使い方③同三●日本語のしくみ/国語動詞の分類/日本語の特質④同四●日本語/日本語の歩み⑤同五●四座講式の研究⑥同六●日本語音韻の研究/連濁の解⑦同七●国語アクセントの史的研究/日本の方言⑧同八●日本語方言の研究/アクセントの分布と変遷⑨論文拾遺●埼玉県下に分布する特殊アクセントの研究/日本四声古義⑩童謡・唱歌編●童謡・唱歌の世界/十五夜お月さん⑪随筆編一●ことばの四季/ことばの歳時記/方言の世界⑫同二●父京助を語る/ケヤキ横町の住人/わが青春の記(別巻)●年譜/著作目録/総索引。①②③は既刊。

中央大学出版部

▼日本比較法研究所翻訳叢書51 フリッツ・シュルツ著/眞田芳憲・森光訳『ローマ法の原理』(四一〇〇円)ローマ人の法や正義に対する基本的な考え方を明らかにし、ローマ法の構造とその特徴ある制度の理解に学問的息吹を与える。

▼三浦信孝編著『フランスの誘惑・日本の誘惑』(二一〇〇円)日本の文学者・知識人は明治以来フランスに何を学んだか。日仏の文学交流の百年を振り返り、21世紀の新しい知的対話の条件を探る。

▼金谷千慧子著『企業を変える女性のキャリア・マネージメント』(一六〇〇円)「人を活かす、組織を活かす、女性の能力を拓く」を理念に立ち上げた「女性と仕事研究所」一〇年の活動から、女性と企業のために熱いメッセージを届ける。

▼金田昌司著『地域再生と国際化への政策形成』(二七〇〇円)地域やまちは人々が学び、仕事し、家庭を営む舞台であり、トータルに言えば「生活空間」である。経済・行政・文化等の知見をもとに創意工夫と新視点に立脚しながら地域の問題の解決とより良い生活空間づくりへの途を考察する。

東京大学出版会

地球環境問題解決のためには、開発と環境保全との葛藤が凝集される「地域」を理解しないことにははじまらない。なかでも、環境問題がもっとも深刻にあらわれる、国家の周辺部を理解する必要がある。二〇〇四年一月より刊行が開始されるシリーズ「島の生活世界と開発」(大塚柳太郎・篠原徹・松井健編、全4巻、各巻三八〇〇円)では、21世紀の環境問題を考えるときに重要なアジア地域とその東に隣接するオセアニアに焦点をあて、熱帯林伐採の最後の最前線ともいえる「ソロモン諸島」(第1巻)、急速に開放経済に移行している「中国・海南島」(第2巻)、そして日本の最南端に位置し独特な道を歩んできた「沖繩列島」(第3巻)を取り上げ、国家の周辺部、あるいは世界システムの末端に位置するこれらの島世界で、開発と環境保全に揺れながらもしたたかな暮らしを営む人びとの現実を紹介し、地域社会をとおしてみえてきた、環境問題への理解とその解決への糸口(「生活世界からみる新たな人間・環境系」(第4巻))を提供する。

東京電機大学出版局

これまでジャーナリズムは、新聞社、出版社、テレビ局などのマスメディアのものであった。しかし、インターネットが急速に普及し、誰もが容易に情報発信できるようになったことで、新たに誕生したメディア企業や多くの個人の手によるニュースが配信され、掲示板では様々な議論が行われている。いまジャーナリズムは、市民の手によるサイバージャーナリズムの時代へと変化しつつある。

ウェブを利用したジャーナリズムの利点として、速報性、インタラクティブ性などがあるが、一方、情報の信頼性の問題やウェブ上の匿名性による人権侵害、デジタル化されたデータが流通することによる著作権侵害といった問題点も見過ぎすことはできない。

▼前川徹・中野潔著『サイバージャーナリズム論—インターネットによって変容する報道—』(三〇〇〇円) インターネットによって変容しつつあるジャーナリズムの現状と問題点を、ビジネスモデル、既存メディアとの相違点、広告との関係、法律との関係、ジャーナリズムへの影響など、様々な観点から論評した一冊。

東京農業大学出版会

へカラー写真集1000の素顔シリーズ)
▼『西富士1000の素顔—もうひとつのガイドブック—』西富士1000の素顔編集委員会編

葛飾北斎の「富嶽三十六景」はよく知られている。四季の「西富士」一帯の自然と動植物のありさま、富士にまつわる歴史・文化を西富士で暮らす人たちの視点で紹介している。この西富士には「東京農大富士畜産農場」がある。

平成一五年十月／B六判
一六四頁／本体価格一六〇〇円

▼『大根踊り人生論』加藤日出男著
東京農大のあの「大根踊り」の発案者が、その時代をかたる。さすが、「若いねっこの会」のリーダーである。いままでの活動、さまざまな人々との交流の世界が生きている。前向きなところに引き込まれる。今に生きる六十二冊目の人生論。

平成一五年十月／B六判
二二五頁／本体価格二二〇〇円

法政大学出版局

▼『森嘉兵衛著作集』全10巻完結！
(最終回配本II発売中)

第十巻『岩手近代史の諸問題』

東北の社会経済史・生活史・文化史研究に捧げた森史学の足跡を集大成。本巻は岩手近代百年の歩みと問題を展望。全巻の索引・著作目録を付す。八五〇〇円

【既刊一覧】 内容見本呈
第一巻『奥羽社会経済史の研究／平泉文化論』 九八〇〇円

第二巻『無尽金融史論』 六八〇〇円

第三巻『陸奥鉄産業の研究』 八五〇〇円

第四巻『奥羽農業経営論』 八八〇〇円

第五巻『奥羽名子制度の研究』 九千円

第六巻『近世農業労働構成論』 一万円

第七巻『南部藩百姓一揆の研究』 九七〇〇円

第八九巻『日本僻地の史的探究・上下』 各二万二千元(下はオンデマンド版)



放送大学教育振興会

平成十六年四月より開講する放送大学の授業科目から主なものを紹介する。

▼学部開設科目

『岐路に立つ大学』（舘昭・岩永雅也編著）：世界の大学は変革の時代を迎えており日本の大学も例外ではない。世の中の知識社会化、グローバル化、情報化、少子高齢化などと深く関連するこの状況をさまざまな視点から把握し理解する。

『世界の産業再編成』（森谷正規編著）：グローバル化が進む世界の産業列国の熾烈な競争の中で起きている再編成の波の現状と課題を把握し将来を展望する。

『国際共生と健康』（新福尚隆ほか編著）：世界人口の増加と経済発展は、地球温暖化・自然災害の増加と相俟って人類の健康被害の増加を招いている。地球のエコシステムを守り、人類と環境が地球で共生していくための方策を考える。

▼大学院開設科目

『技術社会関係論』（森谷正規著）

：われわれが獲得した科学技術は、向後「社会」にいかに関与すべきか。環境・交通・防災・福祉・教育等の問題との関わりを具体的に論じる。

明星大学出版部

年々増加する不登校や学級崩壊、そして学力低下など教育の危機が深刻な社会問題となつて久しい。教育行政機関、学校、家庭でその打開策を模索しているが、明るい兆しはまだ見えていないと言わざるを得ない。このような状況に対処するための出発点として最も大切なことは、その実態を科学的に認識することであると説く『教育調査』（一九九七年刊行）の著者・高島秀樹は、今世紀に入って前書を改訂して『教育調査（改訂2版）』（一九九五円）を刊行。実態をとらえるには調査が肝要であることは当然だが、本来、調査とは科学的な研究の一方法であつて、実態に関する情報を広く収集し、そこから論理的に矛盾のない思考によつて因果関係を明らかにしようとするものであるが、そのための方法を本書は広く提示している。危機を声高に叫び、恣意的な改革方法を提示するのではなく、本書が示す方法にもとづく冷静な認識を基礎として考えていくことが大切であらう。調査を試みる者たちへの推薦の書である。

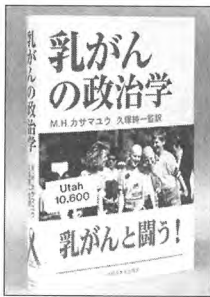
早稲田大学出版部

▼『ドイツ史の終焉―東西ドイツの歴史と政治』（仲井斌／三八〇〇円）東西ドイツはどんな歴史認識の下に国家を築いてきたか。政治と歴史の葛藤を捉える。

▼『インドネシア民族主義の源流―イワ・クスマ・スマントリ自伝』（後藤乾一訳／六〇〇〇円）波瀾に満ちた歴史を描く。「民族主義者イワ・クスマ・スマントリの政治的肖像」（訳者）を新収録。新版。

▼『感性をみかく教育論』（渡辺重範／二〇〇〇円）教育をめぐる声高な議論は有効か。幅広い話題のなかに生きる意味を探り、創造的教育について考える。

▼『乳がんの政治学』（M・H・カサマユウ、久塚純一監訳／二八〇〇円）アメリカの女性たちは乳がんとどう闘っているのか。大統領や議会を動かし、乳がん研究費を勝ち取る経緯を克明に描く。



東海大学出版会

▼ヴァルター・ハンゼン著／小林俊明・金井英一訳『アスガルドの秘密―北欧神話紀行』（A5判／二五〇頁／三五〇〇円）

アイスランドに残る北欧神話「エッダ」は、神々の滅亡と再生が綴られる最終章の「神々の黄昏」によって知られる。特にゲルマン文化圏のドイツあるいはイギリスではさまざまな物語にこの主題が用いられてきた。ワーグナーの楽劇「リング」^①、トールキンの「指輪物語」^②（映画「ロード・オブ・ザ・リング」の原作）^③が有名である。また、テレビゲームや劇画にも北欧神話をもとにしたものがある。今まで北欧神話に描かれた世界は、多くの研究者によって想像上のものとされてきた。しかし、本書の著者ハンゼンはギリシャ神話などと同じようにアイスランドの土地や風景の中に「神々の世界アスガルド」や「女神ヘル」の支配する黄泉の国^④が存在すると仮定し、膨大な文献渉猟を行いながら地学的見地を加え、神話の土地を読み解き、四輪駆動車を駆って北欧神話の舞台を荒涼としたアイスランドの風景の中に探り当てていく。

名古屋大学出版会

▼田中豊子著『溪嵐拾葉集』の世界』（五五〇〇円） 天台宗の「百科全書」とも言われる同書の作者・諸本・成立背景等を明らかにするとともに、説話の場面に光をあてて中世文化の豊饒な宇宙に迫る。

▼山本有造編『帝国の研究―原理・類型・関係―』（五五〇〇円） 帝国の多様な歴史を貫く原理とは何か？ 大英帝国をはじめ、史上に現れた諸帝国の歴史的理解に新たな地平を拓く画期的成果。

▼山本有造著『満洲国』経済史研究』（五五〇〇円） 日本帝国圏において満洲国経済はいかなる位置を占めたのか？ 数量経済的分析により、満洲国経済の全体像を輪郭鮮やかに描き出す。

▼小林傳司著『誰が科学技術について考えるのか―コンセンサス会議という実験―』（二二六〇〇円） 社会の中の科学技術のあり方をめぐって専門家と市民の対話は成り立つのか？ その実際を紹介。

▼成田善弘著『贈り物の心理学』（二八〇〇円） 日常生活におけるプレゼントから臓器移植まで、人間社会のさまざまな場面で登場する贈り物の意味と、背後に働く心の世界を解き明かす。

三重大学出版会

川口元一著『お話電気学―電気物理と回路―』A4、一―三頁（二〇〇〇円＋税）

第1章 はじめに

第2章 電荷とクーロン力

第3章 電界と電位

第4章 導体・誘電体・半導体

第5章 電力

第6章 電流に働く力と磁界

第7章 電磁誘導とインダクタンス

第8章 電磁波

第9章 ケルヒホッフの法則

第10章 交流回路

第11章 フェーサ記号法による回路の扱い

第12章 簡単な過度現象

著者は三重大学の工学部電気電子工学科から教育学部技術科に移り「高校で物理を選択しなかった人にも電気的基本的理解が進む」ような「電気工学概論」の授業を工夫してきた。その集大成である本書は「電波はどのように生まれ、どのように伝わっているのでしょうか。私たちの脳などの複雑な神経系では、どんなふうに情報が伝達できるのでしょうか。電線や半導体の中を電流はどうして流れるのでしょうか。発電所で生じた電気エネルギーがどんなふうに家庭にやってくるのか。電気洗濯機を回せるのでしょうか。蛍光灯はどのようにして目に都合のいい可視光線を出してくれるのでしょうか。…」という書き出しで始まる。

京都大学学術出版会

▼高岸輝著『室町王権と絵画』菊判・五二〇頁・七四〇〇円／朝廷の地、京都に武家政権を成立させた足利將軍家がその支配を確立するには、武力や政治力を強化するだけでは、足りなかった。公家文化を吸収することで、その権威を荘嚴する必要があるためである。肖像で権力の所在を示し、その正当性の由来を合戦図で語る、あるいは非公開の絵画コレクションを収集しそれを巷間に宣伝することで、権威を神秘づける——文化の争奪戦において、やまと絵は重要な役割を果たし、そうした中で土佐派と呼ばれる絵師集団が育っていった。土佐派は將軍家をパトロンとし、將軍家はパトロンであることで、朝廷を睥睨したのである。時代が室町から戦国へと移行する過程でも同様であった。応仁の乱直後に描かれた土佐派の重要な作品の注文主は、細川政元だったのである。「武家による文化の接収」の様相を鮮やかに浮き上がらせ、政治史としての美術史を本格的に切り拓く。国華賞受賞論文「当麻寺奥院所蔵「十界図屏風」の研究」も収録。

大阪経済法科大学出版部

▼向井喜典監訳／岩村等・大田潔他訳『フランス現代史 人民戦線期以後の政府と民衆一九三六—一九九六年』（近刊）本書は一九三六年から六〇年にわたるフランスでの人民と政府と物質的変化の相互作用の歴史を探索している。フランスでの研究はフランスを孤立して扱う傾向にある。多くの研究者が出版している中で、どの程度フランスに固有のものでどの程度までヨーロッパ全体の傾向を反映しているかを考察するものはほとんどない。これらの不足を補うため、フランスの変化する盛衰を比較的・国際的文脈の中に置き、フランスの実績をドイツ、イタリア、イギリスと併置して論述している。本書は多くの有益な統計資料を使っている。従来とは違った観点から古い問題にアプローチを行い、内容に明瞭さと新鮮さを与え、専門書を扱う研究者にも全体史を扱う研究者にも高く評価されている。フランスの政治と社会の性格を理解するうえでも、また日本の民主的統治制度の類似性と異質性をみつめるうえでも役に立つ。一九三六年からのフランス史を論じた文献で、権威ある労作。

大阪大学出版会

▼横田睦子著『渡米移民の教育―葉で読む日本人移民社会―』A5判・二〇八頁五八〇〇円／渡米移民に対し生活の心得や排日期の対処法を伝授した民間諸団体発行のリーフレット「葉」を丹念に収集分析し、斬新な視点で、移民の日常生活から日米移民交渉史まで考察した現代版「葉(道しるべ)」。

▼柏木隆雄他編『エクリチュールの冒険―新編・フランス文学史―』A5判・三〇〇頁・二〇〇〇円／フランス文学の千年を一冊にまとめた教科書シリーズ。大阪大学フランス語研究室の若手研究者も加えた二人が執筆する。中世から現代まで文化的変遷の中で、その表現や作品に常に新しさを求めた文学者たちを追う。

▼松岡博著『「新版」国際私法・国際取引法判例研』A5判・三〇六頁・二〇〇〇円／二七件の重要判例の全てに事実の概要、判旨、評釈を掲載するとともに、関連判例も丹念に引用した判例評釈書。この分野で最もわかり易いと好評の初版をさらに充実。教科書・実務書に最適。

▼『現代英語の等位構造―その形式と意味機能―』岡田植之著／本年度市河賞。

関西大学出版部

▼井上 宏著『大阪の文化と笑い』（一三〇〇円）人間が元気に生き、社会生活をする上で「笑い」がいかに大事な営みであるか。笑いを大事と心得て「笑いの文化」を育てた大阪はどんな街なのか。今も人気のある「お笑い」も、その背景に「大阪の文化」が生きておればこそであり、「笑いのない大阪なんて考えられない」大阪の文化について論じる。

▼栗田和彦著『アマルフィ海法研究試論』（二五〇〇円）アマルフィ海法は、その写本発見から一世紀半以上経た今も、多くの謎を秘めている。本書は、序論で街の歴史を素描したのち、本論で写本発見・公開に至る経緯、編纂時期及び主要規制対象のコロンナ契約に関する紹介・分析・検討を行い、資料編での全条文の試訳などにより、総合的・多角的に同法の真相に迫る。

▼高橋誠一著『琉球の都市と村落』（五五〇〇円）琉球時代に建設された都市や村落は、風水思想と琉球独自の伝統的地理観がみごとに融合している。本書は、新旧集落、格子状集落などを景観復原することにより、その実態を解明する。

関西学院大学出版会

▼木ノ脇悦郎著『エラスムスの思想的境地』エラスムスの思想を宗教改革の只中にあつたヨーロッパという空間的広がりの中に位置づけて論じる。

（A5上製・一四四頁・三八〇〇円）

▼澤利政著『学びを豊かにする学校図書館』著者が学校図書館とともに歩んだ教職五十年の集大成。司書教諭・学校司書に最適のハンドブック。

（A5並製・二二四頁・二三〇〇円）

近刊

▼後藤明・松原好次・塩谷亨編『ハワイ研究への招待―イメージを越えて』（仮題）

若い世代の研究者を中心にした各フィールドからの論考は一般的なハワイ・イメージをうち破りハワイの面白さを再認識させてくれる。

（A5並製・三四〇頁・予価一八〇〇円）

▼関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『民族と宗教』（仮題）（A5並製・二七〇頁・予価二六〇〇円）

九州大学出版会

▼C・ドーベル／天児和暢訳『レーベンフックの手紙』（A5判・四五六頁・三八〇〇円）細菌の発見者レーベンフックがロンドン王立協会へ送った多数のオランダ語の手紙を英訳して、彼の生涯の詳細な研究を付した、イギリスの原虫学者C・ドーベルの貴重な書物の初の全訳。

▼M・J・デ・プラダールヴィンテ著『日本文学の本質と運命―古事記』から川端康成まで』（A5判・四二六頁・七〇〇〇円）神話の再構築としての日本文学を徹底分析した力作。

▼篠原清昭著『中華人民共和国教育法に関する研究』（A5判・四二四頁・七五〇〇円、二〇〇一年十月刊）は二〇〇三年日本教育行政学会賞を受賞した。

▼深川博史著『市場開放下の韓国農業』（A5判・四一八頁・六二〇〇円、二〇〇二年九月刊）は二〇〇三年九州農業経済学会学術賞を受賞した。

▼飯田武郎編『The Reception of D. H. Lawrence Around the World』（菊判・三二二頁・七二〇〇円、一九九九年刊）は二〇〇三年北米ロレンス協会賞「H・T・ムーア賞」を受賞した。

にわか「編集者」の呟き

編集の仕事をするようになってはや三年が過ぎた。著者や訳者という立場から、長年編集の方々にお付合いただいたが、皆さん個性が強く、そこに編集者としての矜持を感じ取ってきた。編集者が本を好きなのは当然だが、「好き」を支える骨太な信念がそれぞれあって、時に応じてそれが顔をのぞかせる。共通するのは、「文化を支えリードする出版」に対する熱意、大げさにいえば使命感であろう。だから、東北の小都市の生意気な研究者であった私などにも、気配りや目配りをしてくださったのだ。協会のある方などは年に一、二度わざわざ出かけてこられたが、それは東北の酒と温泉が目当てであったというばかりではあるまい。若造たちの話に熱心に耳を傾け、いつも口癖のように「なるほどねー!」と相槌を打ってくださった。それがどれほど私たちを勇気づけてくれたことか。にわか「編集者」として、協会のさまざまな方々に助言や指導を仰ぎながら、何とかボロを出さずにやっているが、いつの間にか「なるほどねー?!」と呟くようになった自分自身に気づいてニンマリするこの頃である。

座小田豊（東北大学出版会）

和綴じ本の風合い

自費出版ブームのようである。昨今のカルチャー文化や社会人の生涯教育の広がりが底流にあることは間違いない。それを商業出版が色々な謳い文句で後押しをしている。ひと昔前なら自費出版は非売品と相場がきまっていたものを、定価を付けます、一定期間書店におきます、等々と創作意欲旺盛な市民の射幸心をかきたてるかのようである。

かくいう私もいま自費出版に取り組んでいる。私の俳句の師匠が三年前に癌でなくなつたが、半年間の壮絶な闘いを詠んだ六百句余りをなんとか句集にしたいと思っている。が問題は資金、あれこれの思案の挙句、思い至つたのが和綴じ本。

本文はパソコンによるDTPに近いともいえるが、表紙に和紙を使い糸でかがって綴じつたので当然量産はできない。故人に縁りのあった人達に進呈できれば充分なので、もっぱら日曜日の趣味として本つくりに通しんでいる。和紙の独特の風合いを愉しみながらも、小部数ローコストの出版が可能な時代を待ち望んでいる。

平山勝基（中央大学出版部）

会社はこれから・・・

小会「寄附行為第4条目的」を読む。

「この法人は、九州大学を中心とした西日本一帯の……」二〇〇三年、三つの医科大学と九州芸術工科大学が各々佐賀大学、宮崎大学、大分大学と九州大学に統合し、広島修道大学が新規に加盟して現在二七大学共同芸術書出版会である。会の名称について設立時から今だに意見百出であるが、「九州（僅か間を入れ）大学出版会」で落着。

「民間出版社において採算上刊行を引受けないような優良学術図書」の刊行頒布：「一九七五年の設立の前後二回の募金合せて五千万円弱で今日まで約三十年活動を続けるための事業が、その困難な「目的」を達成するための事業には、たえず寄附行為で募金活動も必要ではないか。

「もって学術の振興及び文化の発展に寄与する……」いわゆる「学界」に寄与する活動であり、関係「学会」で、刊行物の紹介・販売に協力いただきたい。

とにかく、編集者をはじめとした関係者の間に徒労感が残るだけ、という事態は避けなければならない。

藤木雅幸（九州大学出版会）

大阪経済法科大学出版部の誕生

小部は一九八七年九月に設立され、今年一〇月で一八年目を迎える。

本学では、一九八六年前後から出版部設立の準備を進めてきた。出版部創設の意義・目的は、教員の研究成果・業績などの発露となって大学全体の研究活性化に寄与できること、社会への文化発信となること、大学間交流を促進できること、国際交流において側面的に寄与できることにある。しかし当時、日本で出版事業に着手している大学は少なかった。それは「出版事業」というものの重要性を認識しながらも、多くの問題があることを裏付けている。出版事業が財政的に引き合わないこと、体制が組めないこと、既成業者との利害関係があることなどが主要な原因と考えられた。それゆえ、本学で出版事業を軌道に乗せる意義には大きいものがある。

以後、出版部設置のための問題解決に向けて行動を開始し、出版に関する動向や状況を調査・把握するため、他大学への研修などを行った。地理的に近い関西大学出版部などを訪問して多くの情報をいただいた。また一九八七年五月、東京大学出版会、東京電機大学出版局をたずね、各大学の出版部の現況、大学出版部協会の諸事業、出版部設立に際しての留意事項など多くの貴重な助言をいただいた。そのうち、大学内部で慎重な討論を重ね、大学出版部協会への加盟申請を行い、一九八九年四月に承認をいただいた。

設立当初は、本学創設者の故金澤尚淑博士を悼む『故金澤尚淑博士追悼論文集』を創刊、翌年一九八八年には出版企画委員会規程ができ、学術出版に弾みがでてきた。それからは教科書をはじめとして歴史、法律、経済関係などの書籍を刊行し、現在では一〇〇点を超えるまでに、年平均七点を刊行する出版部となった。現在も刊行書籍の質の向上に向け、部員一同、鋭意努力を重ねている。

こうして大学出版部協会や加盟大学出版部のかたがたの暖かい励まし・貴重な助言、熱い情熱で初志を貫いた先輩諸兄の努力により小部は設立された。現在、草創期の理念を継承しつつ、「日々精進」という気持ちで業務に励んでいる。 月城 浩（大阪経済法科大学出版部）

関西支部だより

電子部会からのお知らせ

インターネット利用人口は五千万人を越え、これまでにない可能性をもった新しいメディアとして利用されるようになった。このインターネットを利用して、大学出版部で出版している学術書や一般読者に向けた教養書を紹介する取り組みが始まった。

ひとつは、TFMインターネットタイプという東西NTT、全国三十八のFM放送局が設立したインターネット放送の番組で、学術書を画像や音声を取り入れて紹介する試みである。E-Book Lounge(ブックラウンジ)という番組名で十一月から放送がはじまり、毎週一冊の学術書を著者へのインタビューなどで紹介している(<http://iv.ne.jp/booklounge/>)。また三省堂ブックサイト (<http://www.books-sansho.co.jp/>) では、月ごとテーマを設け、大学出版部の学術書を紹介している。さらに丸善インターネットショップिंगのサイト(<http://www.maruzen.co.jp/>)では「大学出版部協会のおすすめ」が紹介されている。それぞれのサイトを訪問してご覧いただければ幸いです。

部会だより

日本大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

東北大学出版会

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部

158-0082 世田谷区等々力 6-37-12
TEL 03-5760-7801 FAX 03-5760-7804

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

大正大学出版会

170-8470 豊島区西巢鴨 3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

東海大学出版会

257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

514-8507 津市浜浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172